

【第37回社会思想史学会セッション報告】

セッション名:マルクス主義の展開

論 題:オーストリア・マルクス主義民族理論とユダヤ・ナショナリズム:ロシア・シオニズムを事例にして

世 話 人:太田仁樹(岡山大学)

報 告 者:鶴見太郎(日本学術振興会海外特別研究院・ニューヨーク大学)

コメント:西村木綿(京都大学大学院)

日 時:2021年10月29日

場 所:一橋大学国立キャンパス東一号館 1201

参加人数:20人

まず、報告者の鶴見太郎氏から以下の内容の報告がなされた。

民族というものに対する、おそらくレンナーとロシア・シオニストに共通していたまなざしは、民族を主権の問題ではなく社会問題（特に社会経済的な）として捉えていたという点である。そしてそれは、レンナー理論とソ連が採用した民族政策とを本質的に分ける点である。拙著では安易に両者の連続性を論じてしまっていたが、本報告ではこの点に注意しながら、20世紀初頭の民族というものの捉え方の一側面を明らかにしたい。

本報告の第一の目的は、レンナーと似た理論を同時代的に探ることではなく、レンナーへの言及のされ方を検証することで、当時における民族の位置づけを考察し、レンナー理論を今日的観点から再評価する場合に、いかなる諸点に留意すべきかを示唆するものである。

シオニズムは、ユダヤ人の存在の危機感を背景に、パレスチナにユダヤ人の民族的拠点を設置しようとしたイデオロギーである。しかし拙著の前半部分で論じたように、少なくともロシア帝国がまだ存在していた時代、シオニストは大半のユダヤ人がパレスチナへと移民することを想定していたわけでは必ずしもなかった。ロシア帝国という多民族的環境において、ユダヤ人が尊厳を持った民族として見なされ、またそうした自負を持つための根拠としてパレスチナの拠点が想起されていた側面が少なからず見られたのである。そうした側面が強く伺えるシオニストの一派が、最も頻繁に——といっても大した頻度ではないが——オーストリア民族理論に言及していた。その一派とは、世界シ

オニスト機構ロシア支部のメンバーが中心となって刊行していたロシア語機関紙に集まったシオニストである。当時のシオニズムには社会主義系と非社会主義系があり、また早急にパレスチナ入植を目指す者と、ディアスポラの地での準備にまず力を入れる者とに分かれた。ここで注目するロシア語機関紙のシオニストは、いずれの分類でも後者、すなわち非社会主義系でディアスポラ志向の人々である。

ロシア・シオニストの議論の核心は、国家主権の問題にはなかった。つまり、一民族一国家という「民族性原理」を基本に据えていたわけではないのである。むしろその主眼は、抽象的にいえば、社会的な次元における、社会的な問題に置かれていた。ここで「社会」とは、固定的な何かではなく、人々が自ずと集まり、そこで集合的なものが生産され続ける場のことである。そこでの生産物に焦点を当てた「文化」とも異なる。

まずはシオニストがどのようにオーストリア民族理論に言及していたかを示しておきたい。時期としては1905年革命の時期が最も頻出する時期であり、バウアーが主著を上梓したのが1907年だったこともあり、言及される人物はレンナーと、その源流にあたるカウツキーがほとんどである。

ロシア・シオニズムの中心的理論家の一人だったダニエル・パスマニクは、月刊誌『エヴレイスカヤ・ジズニ』（ユダヤの生）の1906年1月号で、「シュプリングァー（＝レンナー）と『文化的』自治」と題したブンドの「文化的自治」批判を寄せている。彼の批判は、領土抜きには民族の十全な保持が不可能である以上、文化的自治は絵空事であるという点に集約される。

パスマニクによると、レンナーは民族問題を哲学的ではなく実践的に考えており、オーストリアが国境に関する紛争で苦境にあることがレンナーの念頭にある。レンナーは「領土原理をまったく否定していないように思われる」。つまり、レンナーは「国境の物神崇拜」を否定しているだけで、領土の重要性までを否定しているわけではないというのである。領土の重要性がシオニストにとって焦点になっていたことは確かである。重要であるのはいかなる理由で領土を重要と考えていたのか、である。

そもそもレンナーの「売り」は個人原理だけではなかった。個人原理と領土原理という2つの言葉で彼の理論を集約してしまいがちであるが、すでに述べたように、レンナーの理論はこの二項対立で整理しきれものではない。シオニストが惹かれたのは、おそらく別の次元である。

第1に、民族を「自己申告制」にした点である。すでに記したように、パスマニクも

主観主義を採用していたし、ジャボティンスキーもレンナーを引きながら、「民族意識」を民族の指標としている。むしろ、現状においてユダヤ人を客観的指標で定義することは不可能であり、事実そのために社会主義者は押しなべてユダヤ人が民族であることを否定していたのだが、単に現時点で不都合であるという理由で客観的指標を退けていたわけではなかったものとみられる。元来、何らかの指標に民族性が規定されること全般に対してシオニストは否定的だった。

第2に、国家や領土と民族の原理的分離である。これも民族を何かに規定された存在ではなく、状況に応じた流動的な存在として見ることに関連する。「国境の物神崇拜」を否定した記述にパスマニクが着目したのはそれゆえである。国家と民族が決して重なることがないことをレンナーはたびたび強調し、パスマニクもそれを追認している。

そのうえで改めてシオニストが領土の必要性を強調したのは、社会経済的な基盤がない限り民族は存続できないと考えたからだった。パスマニクは、ユダヤ教が存続したのはユダヤ人の経済が最近の数世紀まで独立していたことによるとし、最近の社会経済構造の変動はユダヤ人の大衆を同化に導いていると指摘していた。彼らにとって領土とは、そのなかでユダヤ人であることによる経済的不利益が発生しないような社会的基盤のためにこそ、そしてそのためだけに必要なものであった。

彼らはこのように、唯物論的な観点から領土を論じていた。したがって、なぜパレスチナという固有の土地でなければならないのかは実のところ彼らの論理からは十分には明らかではないし、そのことを彼らはあまり論じていない。この点に疑問は残るものの、彼らがあくまでもこうした社会経済的な場のほうを重視していた背景には、民族文化はあくまでもマルクス主義的な意味での下部構造に依存する以上、民族文化そのものに手を加えようとしても無駄であるという理解があったのである。国家によって権利を保護されていたとしても、大衆にはその権利を行使するインセンティブがないからである。

くわえて、文化を基軸にすることが無駄であるというだけでなく、彼らは特定の文化を維持・発展させることにそもそも関心を持っていなかった。むしろその流動性にこそ価値を見出していた。「民族は存在するのではなく、それぞれの瞬間において、創造されるのである。日々の創造を通してのみ、民族は結晶する。民族であるために、血縁的紐帯や共通の経験に言及することはできるが、必要であるのは、創造的空想力のなかに具現化される民族的な意志を示すことである」(Pasmanik 1913b: 6)。そしてそのために必要であるのは、民族国家ではなくあくまでも民族の社会的基盤である。その具体的な

条件としてパスマニクは「パレスチナにおいて、正常な経済生活を送るユダヤ人の農民と都市民を持つ」ことを挙げている (Pasmanik 1911: 7)。拠点地域からの流入によって、それ以外のマイノリティ地域でも民族が存続するという構図をパスマニクは想定していたものと思われる。

パスマニクより一世代若いジャボティンスキーの場合、第一次世界大戦中にパレスチナにイギリス軍のユダヤ人部隊を設置することを提唱し、1920年代にはシオニズムのなかで最も強硬にユダヤ人「国家」を創設することを主張するまでになった。それまでの議論における国家の不在が一気に逆転したかのように、である。

次いで、西村木綿会員から、カウツキー、レーニン、スターリン、レンナー、バウアーの理論形成の比較の上で、レンナー・バウアー (自治論) /レーニン・スターリン (自決論) の対立関係ができるまでに影響したブンドの立ち位置について説明がなされ、ユダヤ人ナショナリストによるオーストリア民族理論の受容という問題について指摘がなされた。(ブンド等社会主義者はレンナー、バウアー論における民族=「文化団体」としての捉え方を重視、ロシア・シオニストはむしろ「領土」の重要性を強調)。

この後、フロアーから、相田慎一会員、西角純志会員、恒木健太郎会員、鵜飼哲会員、細見和之会員から、ロシア・シオニズムとブンドおよびオーストリア・マルクス主義の民族理論の差異と関係について、質疑応答があった。